

東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲

— 天明三年浅間災害に関する地域史的研究 —

関 俊明¹⁾・小菅尉多²⁾・中島直樹³⁾・勢藤 力⁴⁾

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団¹⁾・砂防学会会員²⁾・玉村町教育委員会³⁾・伊勢崎市役所⁴⁾

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1. はじめに | 5. 踏査確認地点 |
| 2. 方法と用いた絵図史料等 | 6. 天明泥流到達範囲図 |
| 3. 東吾妻町・中之条町の立地と環境 | 7. まとめと課題 |
| 4. 発掘調査事例一覧 | |

— 要 旨 —

天明三年浅間災害は、1,500名に及ぶ犠牲者を出した歴史災害である。筆者のうち関・中島・勢藤の3人は発掘調査を通じてこの災害に関わり、小菅はこれまで天明泥流に対して水理学的な検討から、流下の解析を試みている。検出された遺跡や砂防分野の事項に限るのみではなく、史料や供養塔などの存在をはじめ、語り伝えられてきた多くの教訓や幾種類もの語り継ぐべき項目があることを感じつつ、この災害に関して領域外からも出来事を語り継いでいこうという考えを一にしている。

本稿は、天明泥流の痕跡を確認し語り継いでいくべき今日的な課題として、現地に残されている到達範囲とそれに関する伝承や踏査による地点情報を集約していくとするものであり、群馬県内を貫く利根川と支流の吾妻川を襲った天明泥流被害に関する基礎資料として、天明泥流堆積物の分布を都市計画図レベルの精度を目標にたどっていく作業のとりまとめである。これまでに、玉村町・伊勢崎市域については、関・中島(2005)、関・勢藤・中島(2013)、前橋市・高崎市・吉岡町域については、関・中島・勢藤(2014)、加えて、渋川市域については、関・小菅・中島・勢藤(2015)で取り組んできた。本稿は、吾妻川流域の東吾妻町と中之条町域における概ね25km範囲の継続的な取り組みである。過去の災害を正確に伝え、地域の歴史の一断面をたどれる資料として、ささやかながらではあるが、広域的に取り組んでいこうと考えるものである。

社会変化の中で、伝統や伝承が途絶えようとしている今日、地域史的な視点を忘れずに作業に取り組みたいと考えている。時間の制約や検討の不備については、改めて諸氏にご協力を願い、叩き台とするべく今後も作業を継続させたい。また同時に、さらなる展開を目指として取り組みたい。

キーワード

対象時代 江戸時代・天明三年
対象地域 東吾妻町・中之条町
研究対象 天明三年浅間災害・天明泥流

1. はじめに

本稿で扱う天明三年(1783)浅間災害は、新暦8月5日(以下、新暦は算用数字を使用)の浅間山噴火で発生した吾妻川を流下した天明泥流による被害である。岩屑なだれに次いで発生した天明泥流で被災した吾妻川流域の東吾妻町と中之条町域における概ね25kmの範囲で泥流到達範囲の確定を目指す微地形踏査の継続であり、土砂流失、道路や鉄道の敷設などについても地形との関わりとして検討材料とした。

吾妻川中～下流域のこの範囲は、天明泥流が被害をもたらしながら流下した沿岸のうちでも、発掘調査事例の比較的少ない地域である。しかしながら、これまでの伝承や災害地形が色濃く残されているため、天明泥流の到達範囲を現地形から読み取ることはある程度まで可能である。

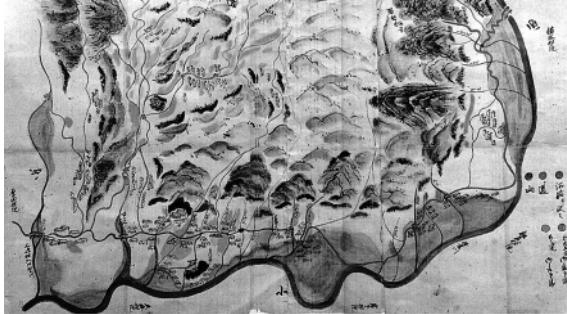
2015年4月29日及び5月9日に吾妻川右岸、7月29日及び9月16日に左岸側の現地踏査をおこなった。限られた時間のなかでの取り組みであり悉皆調査にいたらなかったのはこれまでと同様であるが、現地踏査を通して集約した情報として、関係する伝承や被害にかかわる事項を地点情報として盛り込み原稿の集約をおこなった。

2. 方法と用いた絵図史料等

天明泥流の到達範囲の検討に依拠した事項は、前稿(関・小菅・中島・勢藤2015)と同様である。今回用いた絵図及び参照できる主な先行文献等は次の通りである。

①「三島村泥押し絵図」(郷原区所蔵)(群馬県立歴史博物館1995)

②「三島村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971)



第1図 「三島村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971『岩島村誌』より引用)

③「浅間焼け吾妻川沿い岩井村泥押し被害図」(群馬県立文書館寄託伊能家文書)

④「浅間焼け吾妻川沿い岩井村烟泥押し図」(群馬県立文書館寄託伊能家文書)

⑤「浅間山焼崩泥流入流失仕候処之絵図〔植栗村地内吾妻川之瀬絵図〕」群馬県立文書館所蔵 (中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」2013)

⑥「岩下村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971)

⑦「浅間荒当時の大村略図」(岩島村誌編集委員会1971)

⑧「矢倉村天明三年浅間山噴火荒地絵図」(渡忠男丸氏所蔵)

⑨「矢倉村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971)

⑩「郷原村絵図」(郷原区所蔵、文化七年)(群馬県立歴史博物館1995)

⑪「郷原村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971)

⑫天明三「浅間山焼出候節の控帳」(渡軍平氏所蔵・古文書目録)(岩島村誌編集委員会1971)

⑬天明三「荒地御案内控帳」(渡軍平氏所蔵・古文書目録)(岩島村誌編集委員会1971)

⑭「控 天明三年七月浅間押荒地を示す絵図」(原町誌編纂委員会1983)

⑮「中之条町浅間荒被害絵図」(群馬県立歴史博物館1995、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」2013)

また、歴史地理学の立場から、被害絵図の解析により絵図資料を掲載した検討についても該当範囲を扱う先行研究(大浦2008)として参考にした。

被害人数や「泥入り」の統計を見ておくことも、踏査時に参考とすることができた。当該地域についての火石泥入り被害一覧(古澤1997)を表1に示す。

また、吾妻川中～下流域を流れ下る天明泥流の姿を史料でみると、三島村大武山義珍法印の「浅間焼出し大変記」(岩島村誌編集委員会1971)によれば、8月5日(旧暦七月八日)の噴火の姿と流下の様子を次のように記している。

八日は朝より間もなく鳴る事也。皆草木迄も大風吹来る如くゆれ、神仏の石塔ゆり崩し、人々心持悪く念佛諸仏神に祈誓する処に四ツ半時分信州木曾御嶽戸隠山の辺より光り物浅間力岳へ飛入しと見えし。夫より山鳴動き押出し、上州我妻川通り鎌原村を初として大前より川に附押通り候事第一番の水先に黒鬼と見えて大地を動し、家のかい森の木其外何百年ともなく年をへたる老木皆押しきじき、砂をとばし、つなみ土を吐立煙を立、震動雷電し、第二の泥火百丈余り高く打上、青竜くれなみの舌を巻、両眼日月の如し。一時計り闇の夜にして火石の光り雷ちのひびき、天地は只崩る如く、火焔のほのおは空をつきぬく計なり。

雷鳴とともに土砂移動である「岩屑なだれ」の発生を「山鳴動き」と表現する。そして、「第一番の水先」といい、よもや土砂が流れ込んで吾妻川の水をオーバーフローさせるかのように状況を記し、「つなみ土を吐立煙を立てる」という。そして、第2の流れは中国の四神の一つで河川に棲むとされる「東方青龍」を例えに、「泥」と「火」が一気に山の如く押し寄せ、その中にいくつかの史料の中でも記述される「火石」という高温の本質岩片が含まれ水煙をあげながら流れ下る様を表現している。

さらに、原町在住の富沢久兵衛が著した「浅間山津波記」の記載によれば、この流れは、本稿で扱う流下範囲を次のように流れ下ったといっている。

横谷村一軒も不残押払、死人九人馬十八疋見えず。

松尾村下村流失。三島村上郷より根古屋宮ノ下四戸迄に五十七軒流家、死人十三人馬八疋。岩下矢倉南かは

流れ、北かはは火石にて焼失。厚田十九軒流れ、但し四戸川上りえ巻寄迄流れる。郷原は家は無難。川戸村九軒流失。八日の四ツ六七分時原町え流れ来る。

天明泥流は、このように、一部「火石」を含み水煙を上げながら、様々な形容がなされる凄まじい勢いで吾妻川両岸を襲いながら流下していったのである。

また、当該地域は、吾妻川に向けて急峻な地形を呈し

ている場所も多い。そのため、天明三年(1783)以降の度重なる水害で地形の変遷を経ていることも特に配慮が必要である。明治43年(1910)や昭和10年(1935)の大水害の他にも、例えば明治44年(1911)の当時の岩島村根古屋の水害は、数日来の雨が8月4日根古屋川の沿道約200mを流失させ、10数軒の家屋を洗い流し、犠牲者を出し薬師堂も濁流により奪い去られたと記録されている(吾妻教育会1936)。

第1表 火石泥入り被害 古澤(1997)をもとに作成、支配地は村毎とした。

		三島	厚田	川戸	金井	岩井	植栗	小泉	泉沢	新巻	奥田	五丁田	箱崎	岡崎 新田	松谷	岩下	矢倉	郷原	原町	西中 之条	中之条	伊勢町	平	青山	市城
「浅間山焼に付見聞覚書」 等の記録・古文書による	被害 家屋	8	16	10									6			31	36	15	24			2	17	20	
	死者	19	6	9		1		1					2			4	9							1	

3. 東吾妻町・中之条町の立地と環境

東吾妻町・中之条町は県北西部の吾妻郡内にあり、東吾妻町に北接して中之条町が存在する。中之条町は新潟県と長野県に接する。標高は、中之条町で310m～1,598mを測る。

北部には三国山系がそびえ、南側には盆地・河岸段丘など多様な地形を形成している。嬬恋村と長野県境にある鳥居峠に源流がある吾妻川は、両町を東西方向に延長76kmを流れ、渋川市阿久津付近で利根川に合流する。

東吾妻町は平成18年(2006)に吾妻町と東村の新設合併により町域が広がり面積254km²、人口1.5万人、0.55万世帯(平成22年)の現在の東吾妻町となった。

中之条町は平成22年(2010)に六合村が中之条町に編入されたことにより町域が広がり面積439km² (森林80%以

上)、人口1.7万人、0.69万世帯(平成26年)の現在の中之条町となった。

主な遺跡として、縄文時代ではハート型土偶を出土した郷原遺跡、弥生時代では再葬墓が見つかった鷹の巣岩陰遺跡、古墳時代では四戸古墳群、奈良・平安時代では銅印や奈良三彩が出土した天神遺跡、中世では真田氏の足掛かりとして重要な役割を果たした岩櫃城、近世では天明泥流下から麻畠などが見つかった上郷岡原遺跡の発掘調査事例などの天明三年浅間災害遺跡の調査事例が蓄積されている。

また、東吾妻町岩島地区は古くより麻の産地として知られる。中之条町六合赤岩の山村・養蚕集落は重要伝統的構造物群保存地区に指定されている。

天明泥流の堆積は報告されていないが、今回の踏査では到達範囲に含めている。

4. 発掘調査事例一覧

東吾妻町と中之条町域においては、9遺跡で天明泥流の堆積が確認されている。なお、前畠遺跡(H005)では、

第2表 天明泥流が確認された事例(泥流厚○は、数値不詳)

番号	遺跡名	所在地	概要	泥流厚 (cm)	備考
H001	上郷西遺跡	東吾妻町三島	畑・道・溝	40～140	(財)群埋文2008『上郷西遺跡』
H002	上郷岡原遺跡	東吾妻町三島	水田・畑・建物跡・掘立柱 建物跡・道など	0～400	(財)群埋文2007『上郷岡原遺跡(1)』 (財)群埋文2008『上郷岡原遺跡(2)』 (財)群埋文2009『上郷岡原遺跡(3)』
H003	細谷B遺跡	東吾妻町三島	畑	180	(財)群埋文2009『細谷B遺跡』
H004	唐堀遺跡	東吾妻町三島		約400	吾妻町教育委員会1983『唐堀遺跡』
H005	岩島4号墳	東吾妻町矢倉		約50	吾妻町教育委員会2002『岩島4号墳』
H006	新井遺跡	東吾妻町厚田	畑・石垣・ヤックラ・道・ 復旧溝	○	(公財)群埋文2015『年報』34
H007	厚田中村遺跡	東吾妻町厚田	水田	○	(公財)群埋文2014『年報』33 (公財)群埋文2015『年報』34
N001	石ノ塔古墳	中之条町小川		○	中之条町教育委員会2003『中之条町の文化財』
N002	長岡I遺跡	中之条町中之条町		○	中之条町教育委員会1996『長岡I遺跡』

第3表 天明泥流が確認されなかった事例

番号	遺跡名	所在地	備考
(H001)	上郷A遺跡	東吾妻町三島	(財)群埋文2004『久々戸遺跡(2)・中棚II遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』 (財)群埋文2009『上郷A遺跡(2)』
(H002)	上郷遺跡	東吾妻町三島	東吾妻町教育委員会2011『上郷遺跡』
(H003)	上郷B遺跡	東吾妻町三島	(財)群埋文2008『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』
(H004)	松谷松下遺跡	東吾妻町松谷	東吾妻町教育委員会2014『松谷松下遺跡』
(H005)	前畠遺跡	東吾妻町岩下	吾妻町教育委員会1998『前畠遺跡』
(H006)	四戸遺跡	東吾妻町三島	(公財)群埋文2014『年報』33
(H007)	郷原遺跡	東吾妻町郷原	吾妻町教育委員会1998『郷原遺跡』
(H008)	小泉天神遺跡	東吾妻町小泉	吾妻町教育委員会2004『町内遺跡II小泉天神遺跡』
(N001)	長岡II遺跡	中之条町中之条町	中之条町教育委員会1996『長岡II遺跡』
(N002)	市城塔本遺跡	中之条町市城	(公財)群埋文2015『市城塔本遺跡』

5. 踏査確認地点

(1)吾妻川右岸側

H-A猿橋

天明泥流により流失した猿橋は、長さ12間、横1丈余の吾妻川に架けられた刎橋で、三島・松谷両村の自普請橋であったといい、延享四年(1747)四月の「上州吾妻郡三島村横谷村信州往還刎橋御普請出来形帳」(岩島村誌編集委員会1971)などにその工事や規模の詳細が記されている。近年、右岸側の県道建設に先立ち整備された「渓谷パーキング」の上流に在った橋で、現在の「鹿飛橋(写真1)」の前身となる橋だったと考えられる。「三島村天明三年泥入図」(岩島村誌編集委員会1971)では、「サルハシ」と記されている。



写真1 現在の鹿飛橋(2006年撮影) この前身の橋が猿橋である。

H-B十二沢パーキング付近(上郷西遺跡)

県道整備に先立って建設された「十二沢パーキング」脇の道路(松谷横谷線)は、平成19年(2007)上郷西遺跡として発掘調査された(写真2、天明遺構面標高505m)。天明泥流下から、畑・道などが見つかっている。道は、現在の吾妻渓谷遊歩道の前身で、当時の主要な道筋だったと推定される。天明泥流の到達域は付近で標高510mの少し上位で確認でき、東へ続く遊歩道際の杉林内に堆積物や到達際の段差地形が残されている。



写真2 上郷西遺跡(北から撮影、2007年) 遺跡は天明泥流堆積物に覆われている。

H-C上郷岡原遺跡

八ッ場ダム建設に関連して、平成14年(2002)～平成17年(2005)に発掘調査された。全面を天明泥流が覆い、広範な耕作地の景観が調査されている。北面に迫り出し、現在より10m程下位に位置していた同遺跡は、JRのトンネル掘削残土で埋め戻され、現在、道の駅や公園となっている。

H-Dケイホツバ

「ケイホツ」とは、「開発」を起源とする呼名と思われるが、周辺は近年の圃場整備により姿を変えてしまっている。耕作地単位で天明泥流の土砂を人力で吾妻川へ排



写真3 ケイホツバ(2011年、圃場整備の工事中) 天明泥流堆積物が確認できる。

土し、元の耕作面を確保した先人の困難克服の痕跡で、周囲よりも一段低くなっている耕作地を指している。当地の他にも数カ所で知られている。

H-E細谷の地蔵堂

「泥流は、地蔵堂を除けて流れた」との伝承が地元に残されていて、「天明の浅間爆発の際、村民はこの地蔵堂内に避難した」(岩島村誌編集委員会1971)と伝えられている。このように、現在微高地となっている地蔵堂のある高台と集落を区画するように到達範囲が確認できる。



写真4 細谷の地蔵堂 地元の伝承では天明泥流の被害をまぬがれたという。

H-F根古屋の念仏講

『岩島村誌』によれば、同誌が編纂された当時の記載で、根古屋の念仏講を紹介している。10人ほどの念仏講が農繁期を除く各月16日に夜回り番で宿を決めて集まり、「天明三年七月」と記された十三仏像(掛け軸)をかかげて拝み、直径2mほどの輪を百遍廻しながら、念仏や般若心経、和讃を唱え、仏の冥福を祈り祈願する行事としている。浅間山噴火当時、西国巡礼に出かけていた水出きぬ氏の先祖にあたる水出与右衛門八代目代蔵が、噴火で多くの犠牲者が出了ことを播磨の国で聞き、急いで戻り犠牲者供養の念仏をしたのが始まりで、その際に、十三仏像の掛け軸と1200の珠玉でできた大数珠を持って帰り、念仏講を催したという。また、この時、高野山から持ち帰ったという胴回り170cm余の菩提樹が根古屋の大日如来堂の前の同家墓地に植えられているという。しかしながら、代蔵という人物は、文久間頃の人ともいい、伝え誤りの見方も記されている(岩島村誌編集委員会1971)。

H-G町民スポーツ広場(唐堀遺跡)

「年金積立金還元融資吾妻町民スポーツ広場」の建設に伴い、昭和55年(1980)7~8月発掘調査が行われ、天明泥流の堆積が記録されている。

H-H温川での逆流と新井遺跡

吾妻渓谷から10km下った郷原対岸付近、吾妻川右岸に注ぐ

温川(四戸川)では、「浅間記」(萩原1986)で「四戸川を上り巻寄まで流れる」、「天明浅嶽砂降記」(萩原1989)で「ぬる川と云えるは、五十町程泥さかのぼりしといえり」と、泥流の逆流が記録されている。ただし、「マキヨセ」は吾妻川より直線で1km入った場所で、蛇行する温川に沿えば2kmほどはさかのぼったことになる。「五十町」(約5.5km)は誇張表現かもしれない。

上信自動車道建設に伴い発掘調査が進められている新井遺跡(平成26年度)で天明泥流下で畠や石垣などが見つかっていて、礫を充填した土坑と元の耕作土を掘り返したと考えられる復旧土坑が確認されている(群埋文2015)。被災後の「上掘」の後、生産性の乏しい泥流に対して行われた行為は「二番開発」といわれ、富沢久兵衛は、天明五年(1785)~同八年(1788)春まで工事を行ったといい、「浅間山焼崩泥入畠開発帳」(吾妻教育会1936)として残されている。

H-I竣工記念碑と厚田中村遺跡



写真5 田中地区土地改良総合整備事業竣工記念碑(東吾妻町厚田)
天明泥流が堆積し田畠は荒廃した。

田中地区土地改良総合整備事業の完成により建てられた記念碑は、「対岸に岩櫃山南面に榛名山を位置する当地区は天明三年浅間山の大噴火による泥流によって荒廃したが先祖の苦労により再び耕地化され…」と刻んでいる(写真5)。平成27年春には、上信自動車建設工事に伴い、移設されている。周辺で平成25・26年度に調査された厚田中村遺跡は、上信自動車道の厚田インターチェンジの建設が行われる場所で、天明泥流の下位から榛名山水系の伏流水の湧水する地点に営まれていた水田跡が見つかっている(群埋文2014・2015)。

H-J万年橋

厚田と郷原間に架かる長須橋は両岸とも水面より高く岩壁を利用しているため、簡単には流失しなかった。そのため「万年橋」と呼ばれていた。「浅間より武州迄も河向うに不通用に成る。中瀬渡し船七月十四日より通る。長野原に十五日よりかち橋掛る八月になり漸く郷原に假橋掛る。」(吾妻教育会1936)というように、交通の要となる公儀橋の復旧は急がれた。「郷原に假橋」にあたるのがこの万年橋と

考えられる。この橋は、三国街道渋川の杣の関所が増水で通行できない場合には、大行列が20kmも上流のこの橋を渡ったという公儀橋でもあった(原町誌編纂委員会1983)。その架け替え工事は、公費をもって東部吾妻郡35カ村で行う公儀橋であった。万年橋といつても、橋梁の耐久性には限界があり、寛永三年(1626)から天明四年(1784)までのおよそ160年間に17回の架け替えの記録は残されている。

H-K立石の岩(吾妻七つ石)

立石の岩は、「吾妻七つ石」の一つに取り上げられている(原町誌編纂委員会1983)。享保五年(1720)に原町金剛院円聖法印が著した「再編吾妻記」には、「吾妻七つ石」について書かれていて、それぞれに和歌が添えられている(脇屋1998)という。そのうちの「立石」には、「白浪も浮名も誰か立石の居ても立ちても物思ふかな」と添えられている。川戸神社由緒に関係深い「立石の岩」は、富沢久兵衛が「原町立石の事」として次のように記している(原町誌編纂委員会1983)。

立石ノ岩ト申テ河原ノ中程ニ高サ四丈余リ地元二十間廻リ之大岩石在リ往昔ハ川流レ川戸村ノきわヲ水流レル、大岩ノ廻リニ原町ノ立岩河原名所とて古畠林等有之、然所ニ川戸村ヨリ原町ト論争ニ成リ善導寺金剛院其外ノ者立会取扱ニ済ス、此訳ハ下ノときわのふち出ばなヨリ大岩エ引キ平井戸川ばたノ大石エ引キ河原半分ヅツニテ川戸原町さかいを定ル、大昔、岩櫃城主吾妻太郎行森落城之時、立石岩之上ニテ自御首ヲかき切り河戸ノ岸エ投玉フ、是則首之宮大明神ト奉鎮ルなり、右大岩、四十二年前寛保二壬戌八月朔日関東大満水前代未聞ト申候所其節ニさえ無難ノ立石、此度浅間荒ニテ押払、何国工參候哉不相知候、尤是ヲ記も無益なれども、名所ニハ有之候得共、立石トいふ事末世ニ至テ知ル間敷ト思ヒ委細記置

といい、天明泥流で消えてしまった地元名所の顛末を書き残している。天明の災禍により消えゆく地元伝承を語り継ごうとした先人の記述をこの史料で知ることができる。

H-L田辺橋の露頭

『群馬県吾妻郡誌追録』には、「田辺橋を川戸村へ渡りますと昨年切り開いた新道の崖に一米以上の厚さに堆積して居る美しい断面を見せて居り、附近に泥流の浮かして来て置きざりにした巨大な熔岩塊があります。此の附近一帯を「荒れ場」と申して居ります。」(吾妻教育会1936)と記されている。現在、田辺橋周辺にこの浅間石を確認することができないが、80年程前の描写を確認する。現在の「たんべはし」は、昭和36年(1963)12月に竣工されたものである。

H-M伊勢宮～お茶不動

大浦(大浦2008)は、現在の左岸JR中之条駅周辺の被害域を地域文献等の情報を集約し現地比定していく、壬申絵図に描かれる諏訪社・吾良社・不動を被害絵図と比定している(後述の左岸側N-C地点を参照)。

H-N流動岩(浅間石)

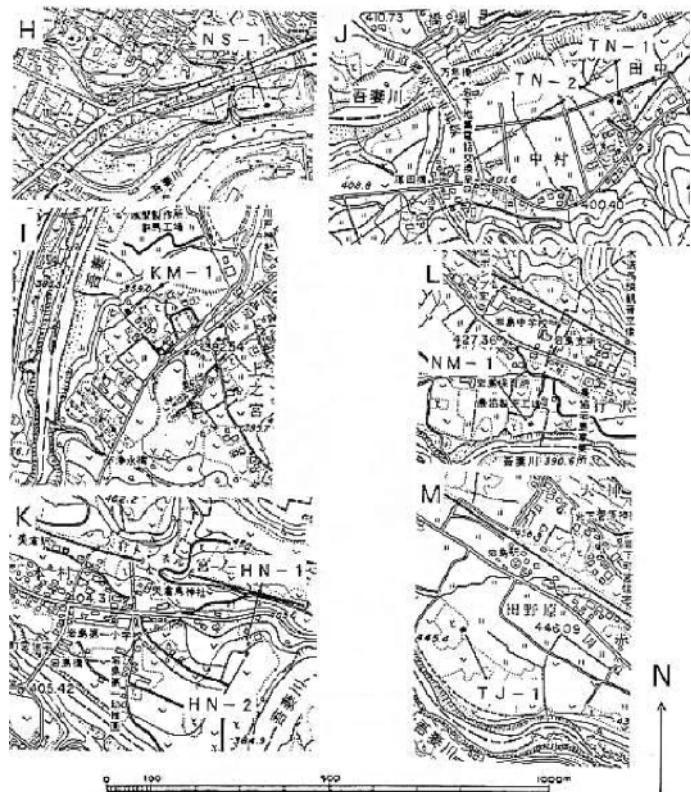
中村によれば、「看板に「雷神岩」とある。北西方に雷神岩の絵入りの案内板があり、この説明文から、この付近の「流動岩」一帯には、天明泥流の大小の岩塊があつたが、河川整備などで消失したと読み取れる。」と記している(中村1998)。踏査では、案内看板は朽ち放置されていた。また、現存する流動岩自体も雑木や雑草によって目視し難くなっている。

H-0佐藤家

東吾妻町五町田にある佐藤家では、被災時に移築され、現在築300年ともいわれる茅葺き屋根の民家を保っている。当家を守ってきた歌人の故佐藤正子氏は、「天明の世の移築とふ茅屋(ぼうおく)に今を住み継ぐいろり焚きつつ」の句を残している。

H-P箱島田圃の浅間石

中村の報告に、打ち欠かれ移動させられた浅間石は、残された芯にあたる部分で2m程の浅間石であったが、さらに平成になって行われた圃場整備事業により片付けられてしまった。「東村役場の職員の話では「子供の頃は、



第2図 東吾妻町(吾妻川流域)の浅間石位置 中村(1998)より引用。

もっと大きな岩塊で、その上で遊んだ」とのことである。岩塊の底面は、地表面に重なっており、多少動かされた可能性がある」と記されている(中村1998)。

他にも残された浅間石については、中村により、東吾妻町の吾妻川流域で本稿該当範囲に、次の地点5ヵ所、計7石(第2図:川戸上之宮、厚田田中(2)、矢倉本村(2)、岩下行沢、岩下天神)が記されている(中村1998)。

(2)吾妻川左岸側

H-Q吾妻渓谷出口

吾妻渓谷を抜けた泥流は、この付近では、右左岸で約510~520mの高さに堆積物が残されていることが確認できる。日本一短いトンネルで知られた樽沢隧道付近では、ちょうど旧JR吾妻線の少し上位とみてよいだろう。

H-R松谷の供養塔

僧円心が松谷に建立したとされる「浅間荒れの受難者供養塔」の存在が、地元を扱った郷土誌(脇屋1998)に記述されているが、現在その所在は不明である。これまでの天明三年浅間災害関連の供養碑研究の一覧表では知られていない。松谷上地区の十王堂や円心和尚の墓や庵跡周辺でそれを今回の踏査で確認することはできなかった。

H-S雁ヶ沢橋

松尾・横谷両村境にあった雁ヶ沢橋は、享保六年(1721)架け替えられたものであった。高間の御林で伐り出された木材で、岩下・矢倉・郷原・三島・横谷・河原畑の6ヶ村の人足・掛替入用費は林・長野原・坪井・勘場木・立石・羽根尾・古森を加えた13ヶ村で普請された史料が残されている(岩島村誌編集委員会1971)。天明泥流で流失するが、天明七年(1787)からの掛替は松尾・横谷両村の自普請橋となったという。

H-T大割目周辺の地点情報

平成17年(2005)9月の松谷の大割目周辺におけるバイパス工事に伴う代替え地造成工事ではJR吾妻線山際寄り北側(写真6の中央付近)まで天明泥流堆積物が確認できた。



写真6 大割目周辺(2005年9月) 造成工事中には天明泥流堆積物が確認できた。

H-U松谷神社

「荒神様」と地元で呼ばれ、養蚕の神様として近隣にも知られている。現在の場所へ移ったのは享保年間といい、天明泥流で社殿は跡形もなくなったという。世話人一同は、吾妻一帯に寄進誓願を行い、天明七年(1787)には社殿を再建したとされる(写真7)。明治40年(1907)の神社合併令の施行により、22社が合祀となった。再建に向けての寄附帳(岩島村誌編集委員会1971)は次のように記している。

去る卯年浅間山大変の節御宮立砂石押掛け流失仕、遠近御参詣方御望通り、先仮に勧請仕、当春迄漸く砂石取除候処、御社跡敷台、石壇の義不動、その仮御座候。此度神殿造立相始め年月を重ね候ても御宮御宮殿仕度念願に御座候得共、大変に候。願主氏子自力相不叶、罷出候処、益々…。



写真7 松谷神社 天明泥流により被災した後、再建された。

H-V松谷松下遺跡周辺

松谷松下遺跡周辺の地形は、国道145号、JR吾妻線の付け替え等により大きく改変している。旧吾妻線線路敷き内にも天明泥流堆積物と思われる土砂はみられず、黄色ローム層が通りすがりに観察され(写真8)、付近の到達域は、国道付近までと考えてよいだろう。



写真8 周辺工事の露頭(2015年9月) ここでは天明泥流堆積物は確認できない。

H-W松谷の国道拡幅擁壁工事断面

東吾妻町松谷の日野宅前の国道145号脇歩道拡幅に伴う擁壁の付け替え工事の際の観察では、天明泥流堆積物は確認されず、ローム層が確認できた(写真9)。地形から見た周辺の到達範囲は、国道付近と考えてよいだろう。なお、この日野家宅の母屋解体で確認された棟札は、「天明三年」と記されていて、天明泥流直前に建てられたものと推定される。



写真9 松谷の国道脇工事の断面(2008年8月) 掘削断面には天明泥流堆積物は確認できない。

H-X応永寺

東吾妻町岩下「新四国東(あずま)八十八か所」85番応永寺の絢爛な山門は、天明三年(1783)三月落慶といわれ、天明泥流の流下を高台から見下ろしていたことになる(内山2001)。

H-Y大村地区の埋没遺物と周辺情報

富沢瀬市報告(岩島村誌編集委員会1971)は、大村地区用水池底から発見された遺物を紹介している。この地区の家屋等を5尺下に埋めつくした、と伝えられている。昭和38年(1963)に用水工事で出土した農具や什器が掲載されている。岩島中学校(平成26年度末廃校)周辺の被害である。

また、岩下郵便局前国道南での県文化財保護課の試掘(平成17年(2005)11月)では、表土下40cmで、40cmの厚さの天明泥流堆積物が下位に僅かのA軽石とともに確認できた(写真10)。しかし、麻の里会館建設に伴う、前畠遺跡(昭和62年(1987)吾妻教委)の調査では、確認されていない。

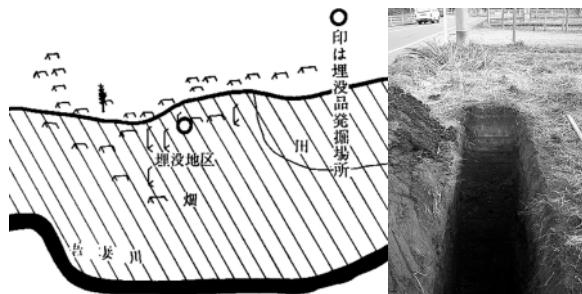


写真10 東吾妻町岩島周辺の被害(『岩島村誌』より転載)と試掘断面 左の被害図の範囲内では右の写真のように地表面下に天明泥流堆積物が確認できる。

H-Z矢倉鳥頭神社の神代杉と延命寺標石

矢倉字宮の脇に鎮座する鳥頭神社は、口碑によれば創立は建久年間といい、氏子域は、郷原・矢倉・岩下で、明治40年(1907)には境内に諸社11社を合併したという(神社庁吾妻支部1989)。境内にある神代杉(一名「親子杉」)は、太古日本武尊東征の際に手植えをしたものともいい、その姿を天下に誇っていたが、天明泥流に際した襲火で、数日間にわたり凄まじい勢いで燃え続けたという。時の龍徳寺住職の円心和尚の手により、4m余の高所で伐り倒され、焼枯した神代杉の内部にその後植え付けられた杉が堂々とした姿を誇り、「親子杉」の別名をもつようになったという。平成8年(1996)3月国道拡幅工事により、この神木は伐り倒されることになるが(写真11)、神代杉は、すぐ脇の別の杉に付け替えられ、同じ状態でその姿を保っている。

また、明治43年(1910)、「関東大水害」とよばれる関東地方を襲った大水害が発生した年に、「浅間山延命寺」と刻まれた門石(石標)が吾妻川の25km下流、東吾妻町矢倉地内の吾妻川河床で発見され、一時矢倉の鳥頭神社に保存された。その後、昭和18年(1943)に鎌原区に戻され、現在は観音堂の境内に据えられている(写真12)。「龍徳寺は、上原益太郎氏宅の裏手にあったと伝えられている」(岩島村誌編集委員会1971)とか、「龍徳寺には、延命寺の石門が流着し近年までおかれていた。円心没後、文化三年二月に無住寺となり、寺子屋となり、明治初年学校として生まれ変わる」(小池1989)あるいは、「新四国東(あずま)八十八か所八十六番で戦国のころ応永寺の末寺として創建され、天明三年に泥流被害で流失。その後、再建され、明治初年に本寺に合併され廃寺になるが、その跡地は定かではない。墓地は、無縫塔16基や庚申供養塔などがあり、JR矢倉駅の入り口にある」(内山2001)とい



写真11 移動後の神代杉 平成8年工事に伴い山側へ数m移動した。

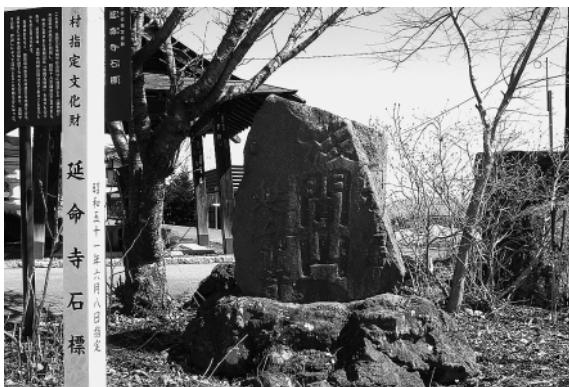


写真12 「延命寺」の標石 現在は鎌原観音堂境内に据えられている。

うのような情報もある。付近では、近年給食センターが建設されたが、工事に伴う発掘調査などの情報はない。

H-AA新井バイパス周辺及び高橋家の伝承

付近には、国道145号バイパスの北側の南面斜面地には分譲された宅地やアパートが並んでいる。この工事の際には周辺にあった2mほどの大きさの浅間石も処分されたという。

また、県道南に隣接する高橋家宅では、昭和28～29年(1953～54)頃、水力発電所の建設に伴って、地下水が涸れた。そのため新たに井戸を掘ったところ、「3m掘ったら、囲炉裏に掘り当たった。囲炉裏や火鉢、茶碗などが出てきた」と伝えられている。3m下に当時の民家が眠っている可能性が指摘できる。したがって、天明泥流の到達域もこの付近では、JRや道路敷設工事に伴う削平なども考えられるが、概ね県道付近までと考えてよいだろう(写真13)。



写真13 新井周辺の到達範囲2006年4月撮影 天明泥流の到達範囲は写真上の県道付近までと考えられる(写真合成)。

H-AB新井の庚申供養塔と馬頭観音

宝暦十二年(1762)を刻む庚申供養塔と朱が施された馬頭観音は、善導寺山門から200m西の新井地内で、昭和40年(1965)頃、道路部分の工事残土から見つかったものである。この作業の様子を見ていた地元住民が農耕機を使って運び戻し、近くの道脇に建立されたものが、この2基の石塔である。顔料が塗られた馬頭観音は現在でも、朱色が明瞭な状態である(写真14)。



写真14 新井地内の庚申供養塔と馬頭観音 昭和40年頃、道路工事中に見つかり再建された。

H-AC善導寺門前供養碑と「泥町」の伝承

東吾妻町原町にある浄土宗善導寺の門前には5度に及ぶ天明三年犠牲者の供養碑が残されている。6回忌、23回忌、33回忌、50回忌、150回忌というように5回にわたって手厚く回忌供養されてきた供養碑である。山門付近は、現在「泥町」ともよばれ、天明泥流がそこまで到達したことがうかがわれ、地表数10cm下には天明泥流堆積物が確認できる(写真15)。また、この山門付近では、流れ着いた遺体の弔いもおこなわれたという言い伝えがあり、先人の美挙に対する供養と重なるのかもしれない。



写真15 善導寺門前供養塔 下水道敷設工事では、僅か数10cmの深さで天明泥流堆積物が確認できた(平成20年(2008) 10月)。

H-AD宗安寺跡

しんしょくあずま

新四国東八十八か所四番宗安寺は善導寺の末寺で寛永年代に善導寺の隠居寺として創開された(吾妻教育会1936、原町誌編纂委員会1983)。文化年間(1804-1818)頃に復興したとされるが、幕末には無住大破する。現在、その跡地の小さな社には、薬師とも知れぬ仏像が置かれる。周囲には25基ほどの墓標が残されている(内山2001)。現在の「さくらゆうえんち」がその場所で、石垣の大部分は、泥流中の浅間石が利用されている。



写真16 宗安寺跡地 この場所は天明泥流の到達範囲内である。

H-AE吾妻奉行所

御殿奉行所に於いて吾妻一郡真田領の支配がなされ(原町誌編纂委員会1983)、御殿並びに郡奉行役所は元和の新築以来約50年の寛文年間の頃、修繕改修を必要とするようになった時に、領主沼田城の真田伊賀守信直は経済不如意であったので御殿並びに役所の建物を顕徳寺に施入し、寛文三年(1663)上之町矢島権兵衛方に役所を移しこれを原町御陣屋と称した。その後17、8年を経て天和元年(1681)十一月伊賀守没落でこの陣屋も廃絶したという(原町誌編纂委員会1983)。この地が天明の被害に遭遇した際に、細川22万両の「御手伝」では、郷原村から平村までの12カ村へ支払われた普請金は「御金原町五郎兵衛所に御置き遊ばされ、村々へ普請金御割付け・・・」(原町誌編纂委員会1983)といい、総額5千両が原町矢島

五郎兵衛屋敷に「御置き」された。天明浅間災害直後には、「泥押被害情況視察や罹災民救済事務や救済工事復旧工事監督や幕府吏員の宿泊滞在等頻繁を極め幕府の救恤金金庫の一時設置や、願届用務受命報告用務のための村々役人の出入等で御本陣五郎兵衛方は隨時多忙であった」という(原町誌編纂委員会1983)。いわば、御普請時の吾妻郡工事事務所本部の会計の任を司っていた人物矢島五郎兵衛である。御殿入口角より西へ間口40間3寸清左衛門屋敷・その西隣間口35間4尺3寸矢島権平衛屋敷・その西隣間口30間5尺7寸矢島五郎兵衛屋敷(貞享三年御水帳)と記される(原町誌編纂委員会1983)。

H-AF顕徳寺の多宝塔

天明六年(1786)の有縁無縁萬靈のために建立した多宝塔形の大塔婆(写真17)は、もとは字下之町の吾妻川のほとりにあったといい、浅間押しの際の死者に対する供養のために建立されたものと伝え、現在顕徳寺に建てられている(吾妻教育会1936)。



写真17 顕徳寺の多宝塔 現在の場所は天明泥流の到達範囲外である。

H-AG河原地蔵尊

総合グラウンド西の崖際にある河原地蔵尊(写真18)は、山口六兵衛や新井忠右衛門らが発起人となって被害の翌天明四年(1784)に建立されたという。平成16年(2004)の中越地震を機に、背丈を低くし、改めて開眼供養を行い、東屋を建てた由が案内板に記されている。



写真18 河原地蔵尊 災害の翌年に建立されたという。

H-AH 山田川橋～棚下

天明泥流は、山田川の落合に突き当たり、公儀橋の山田川橋をそっくり漂わせて、棚下(写真19)まで持ち上げてしまったという(原町誌編纂委員会1983)。「六月掛け替えた山田川橋は泥流により上流のたな下まで三丁(330m)ほど押し戻された」(萩原1986)といい、山田川橋は、一端「たな下」まで流され、また下流へと呑み込まれていったのだという。当時の橋は、現在よりも「一町半乃至二町程上流」にあり、天明三年には、「十六間半」の刎橋(原町誌編纂委員会1983)だった。



写真19 棚下 山田川対岸から望む。この地点まで天明泥流は逆流したという。

N-A 石の塔古墳

昭和38年(1963)、耕作者がゴボウ穴を掘ろうとした際に竪穴式石室を発見、その後、群馬大学の尾崎研究室により発掘調査が行われた。出土した直刀は、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」に展示されている。築年代は5世紀末とされるこの古墳(中之条町歴史民俗資料館2003、中之条町教育委員会2003)は、天明泥流に覆われていて規模は確認されていない。

N-B 石の塔の浅間石

平成18年(2006)町指定史跡の石の塔の浅間石は、清見寺の南西400m、JR吾妻線をはさんで吾妻川寄りに所在

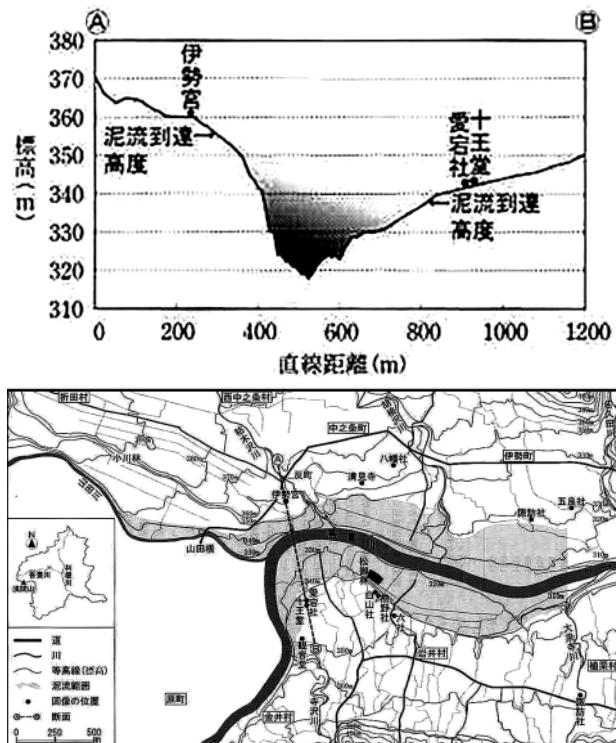


写真20 石の塔の浅間石 吾妻川左岸段丘上の畠の中に位置する。

する。現在の大きさは、東西4.5m、南北5m、高さ3.5mで、北側は、庭石として削り取られている。

N-C 伊勢宮～お茶不動

山田川合流点～JR中之条駅南の付近の被害を記した絵図は複数残されている。この周辺の被害域を絵図等の情報集約で現地比定し、「攻撃面側の中之条町では標高350mを超すが、滑走斜面側の岩井村では340mに達していない」(大浦2008)として、到達高度差17mほどの想定(第3図)がなされている。しかし、今回の踏査では、右岸側で堆積物や地形から345m付近までの到達を想定した。また、左岸側で伊勢宮(標高360m)下の国道145号の標高は350mを計り、JR吾妻線の標高が345m付近で、この急崖斜面を超えたかどうかが到達範囲と推定するに留まった。第3図の示す「355m」までの到達は、現形や堆積物の分布から確認できなかった。今回の踏査では、「左岸側で345mのJR線路と350mの国道の間、右岸側で345m付近までの到達範囲、到達域の不揃いがあっても攻撃斜面側で数mの高低差があった」とする程度の確認とした。また別に、河床勾配の急な上流長野原町域で6m程度の高低差を確認した例もある。この点からすれば、今回踏査をおこなった付近での「到達高度差17mの想定」は、流下特性とするとやや過大な想定かもしれないと考えられる。もっとも、被災後にJR吾妻線や国道145号などの開削による地形の改変がなされたことを考慮した上で議論となるだろう(第6図右岸側H-M地点)。



第3図 中之条～岩井横断及び泥流範囲復原図 大浦(2008)を引用。

また、「お茶不動」と呼ばれる堂宇や諏訪社と五良社の寺社の隨伴樹が絵図に記され、泥流到達範囲が一部及ぶ程度とし、附近の到達域を大浦は標高330m手前としている。残念ながら、このお茶不動は近年の圃場整備で移動するなどしており、到達域のランドマークとすることができないが、周辺の旧地形で推定域を読み取ることができ、妥当な推定と考えられる。

N-D伊勢町での見聞－「段波」

作者不明ながら中之条町伊勢町近隣の人物が書き残した「天明浅間山焼見聞覚書」(萩原1986)によると伊勢町下の吾妻川では、「波の高さは、15メートルとも、30メートルともはっきり見定めたことのできた人はいない。一番の流れ、二番の流れ、三番の流れと3度押し流れてきたのであった」とあり、複数の段状の形をした進行性の波(『地形学辞典』:二宮書店1988)である「段波」として流れ下ったことが記録され、この付近で目撃された流れの特徴としてとらえておきたい。

N-E林昌寺門前供養塔

中之条町伊勢町の林昌寺門前には、災害後100年の供養碑が200回忌供養塔とともに残されている。県令楫取素彦が撰文した「災民修法碑」は、明治15年(1882)3月「余任を本県に辱(かたじけな)くするを以て其事を書すを請く。」(萩原1995)と結んでいる。200回忌供養塔は、県知事清水一郎揮毫による「災変受難供養碑」と題される供養塔である。



写真21 林昌寺門前供養塔 山門の手前に向かい合いに建てられている。

N-F松見橋～名久田川の逆流(吾妻神社)

中之条町の名久田川でも、「名久田川の上流へ遡り、和利宮(吾妻神社)森の下まで火石や大木が流れ着いていた」(萩原1986)と記録されているので、1.5km以上も上流の吾妻神社付近まで火石などが逆流したことになる。



写真22 松見橋 ここで名久田川が吾妻川左岸に合流する。

吾妻川河道内の泥流のピーク水位が大きかったことがうかがえる。翌天明四年(1784)、名久田川付近を通過した松代藩士が残した見聞記「上州草津道法 夢中三湯遊覧」(萩原1985)に、

(七月二十一日) 此辺去七月八日浅間大荒之節十八町此上沢逆流に泥水火石押上セ、高サ三丈余も泥の跡脇(歴)然たり。其外大石大木押行、木の折口錫杖のことくにひしけあり。大石とも五六十日も雨ふり候へハ中より火焼出て候よし。

と書き留められており、この一年後の災害地の状況は付近の状況を記載したものである。

N-G西浦遺跡

青山松見橋左岸の工事露頭(西浦遺跡)では、平成22年(2010)5月の県文化財保護課試掘(工事立会い)により天明泥流堆積物が確認されている。現在の国道部分まで到達している事が確認できる。



写真23 松見橋左岸側工事 1m程度の天明泥流堆積物が確認できた(2009年3月)。

N-H青山の浅間石

中之条町の青山や市城にも複数の浅間石があったが姿を消しつつある。青山の浅間石は、東西3.2m、南北7.8m、高さ3.0mを計り、頂部には所有者によって建てられた「天明浅間大爆発二百周年記念」と刻んだ記念碑がある。平成6年(1994)町指定史跡(中之条町教育委員会2003)。



写真24 青山の浅間石 浅間石の頂上には記念碑が建てられている。

N-I市城の浅間石

JR吾妻線の北に所在する浅間石。付近は天明泥流に覆われた地形を色濃く残していると思われる。盛り土の線路敷きと造成による国道353号で画される耕作放棄された地形を留め、傍らに浅間石が残されている。



写真25 市城の浅間石 JR吾妻線の線路北に所在する。

6. 天明泥流到達範囲図

作成した天明泥流到達範囲図を第4～7図に示す。

同図の基図は電子地形図25000(国土地理院発行)の「長野原」「小雨」「群馬原町」「中之条」「金井」「上野中山」を使用して繋ぎ合わせ、その中から、天明泥流到達範囲図作成に必要な範囲を2万分の1の縮尺で切り抜き、4枚のA4版の基図とした。

これらの基図に、第4章で整理検討した遺跡発掘時に確認された天明泥流堆積物の有無(第2表、第3表)、都市計画図レベルの地形図を用いて第5章で整理検討した天明泥流の流下に関わる痕跡、伝承等の確認結果をもとに天明泥流到達範囲を確定し図示した。

7.まとめと課題

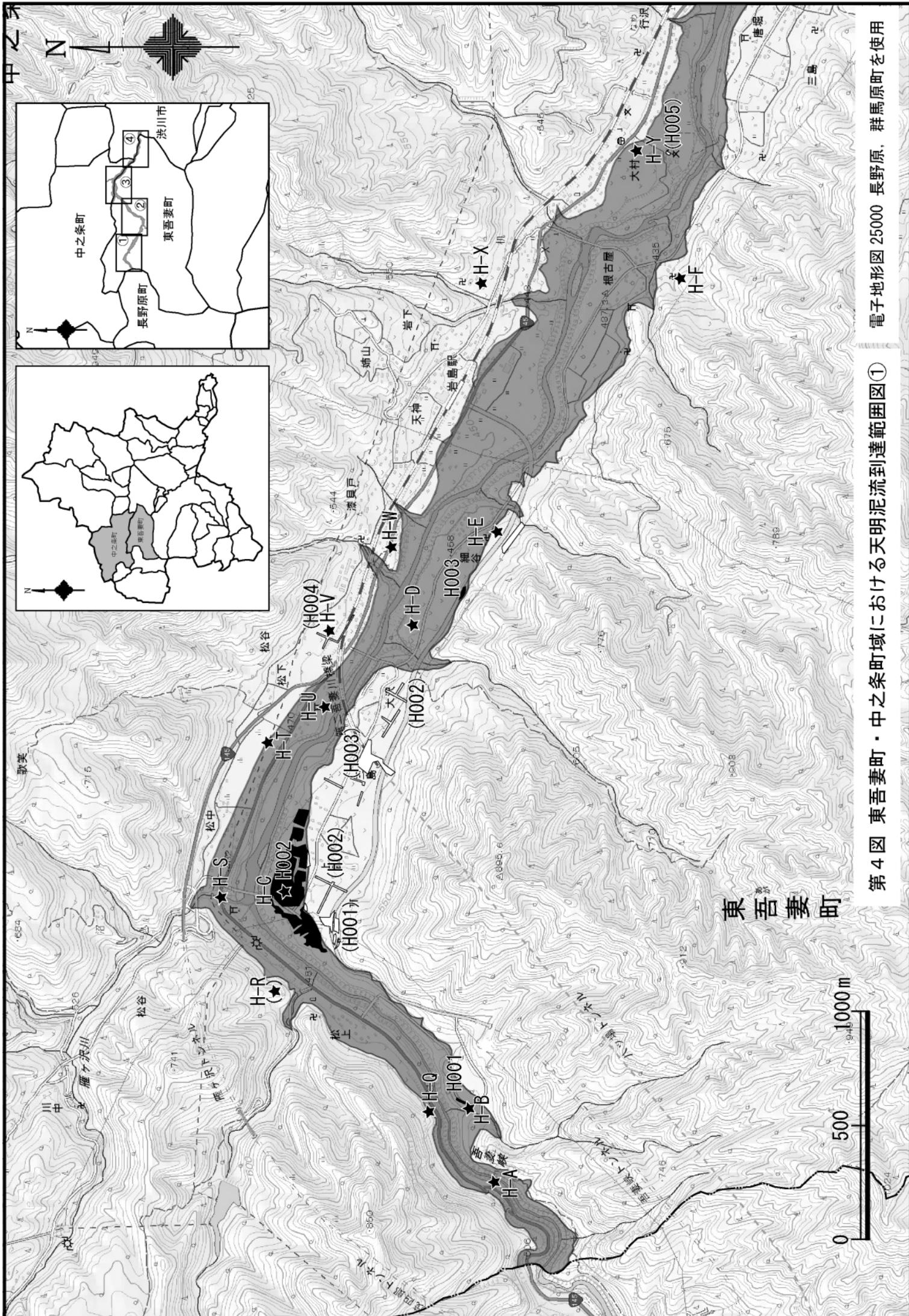
東吾妻町と中之条町域における吾妻川流域は概ね25kmの範囲である。吾妻川に沿った段丘上には集落が形成されていて、それを繋ぐ国道145・353号や昭和17年(1942)にはじまるJR吾妻線などの幹線の建設工事が、天明泥流の到達した範囲の被災地形と並走することが、渋川市域での例に漏れず読み取ることができた。

今回扱った範囲は、吾妻川が吾妻渓谷を抜け出る地点から、河床勾配が緩くなり始める渋川市域に入る直前までの範囲であった。周辺の開発もさほど進められてはおらず、被災地形を想定するには比較的分かり易く、情報も比較的充実していた。しかしながら、地元文献に文字として残されていても、もはや地元では失われつつある情報にも出会い、改めて語り継ぐ意味合いを考え直すこともあった。

被災地形の復元も、地表面だけでは限界があり、確定や検証には今後とも遺跡で見つかる資料や事例等にも着目されるべきだろうことは引き続き感じられた。

筆者4人で時間の調整をはかりながら踏査の機会を重ねたが、文献で得られた情報に対しても現地を確認できなかった地点も残され、地点踏査や加除修正は今後の課題とし、改めて諸氏にご協力を願う次第である。今後も作業を継続させるとともに、さらなる展開を目指していきたいと考える。

また今回、中之条盆地とその周辺の地形を研究フィールドとされている山口一俊氏に原町周辺を同行いただき、教示受けられたことは、大変有益であった。地元住民や路傍での聞き取りに快く協力くださり情報を提供くださった諸氏に対して重ねて、ここに記して感謝申し上げたい。

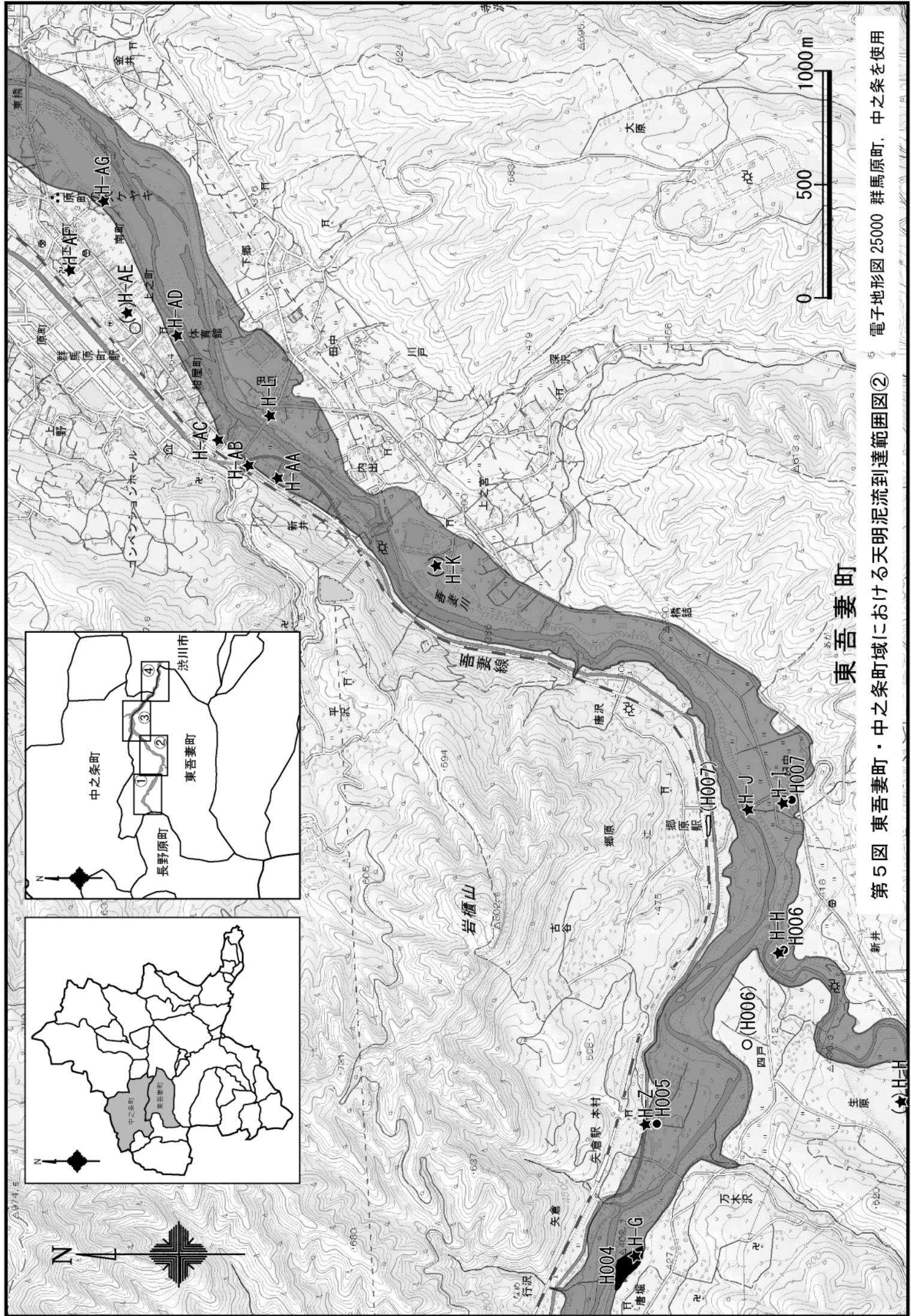


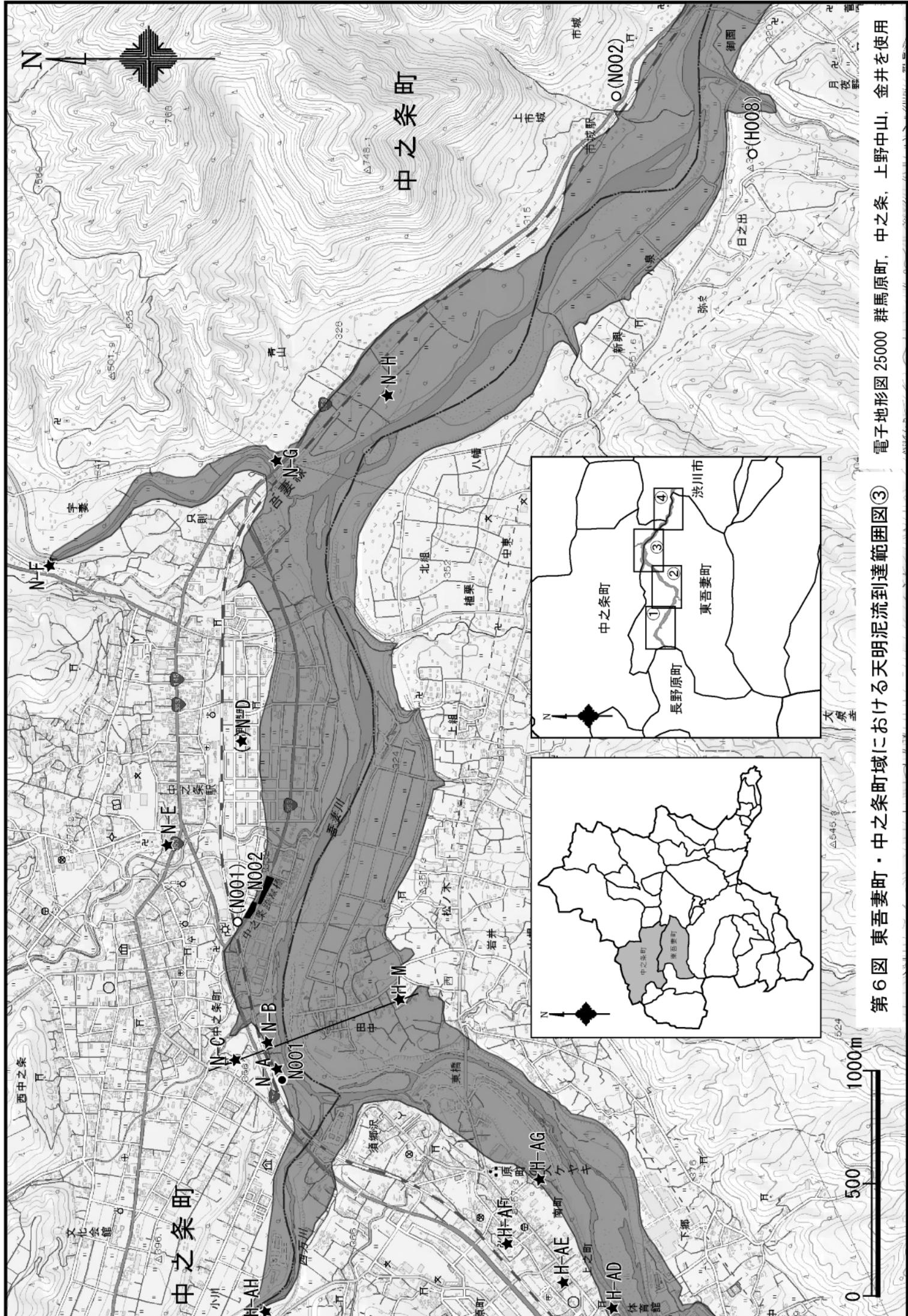
第4図 東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲図①

電子地形図 25000 群馬原町、中之条町を使用

第5図 東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲図②

新井

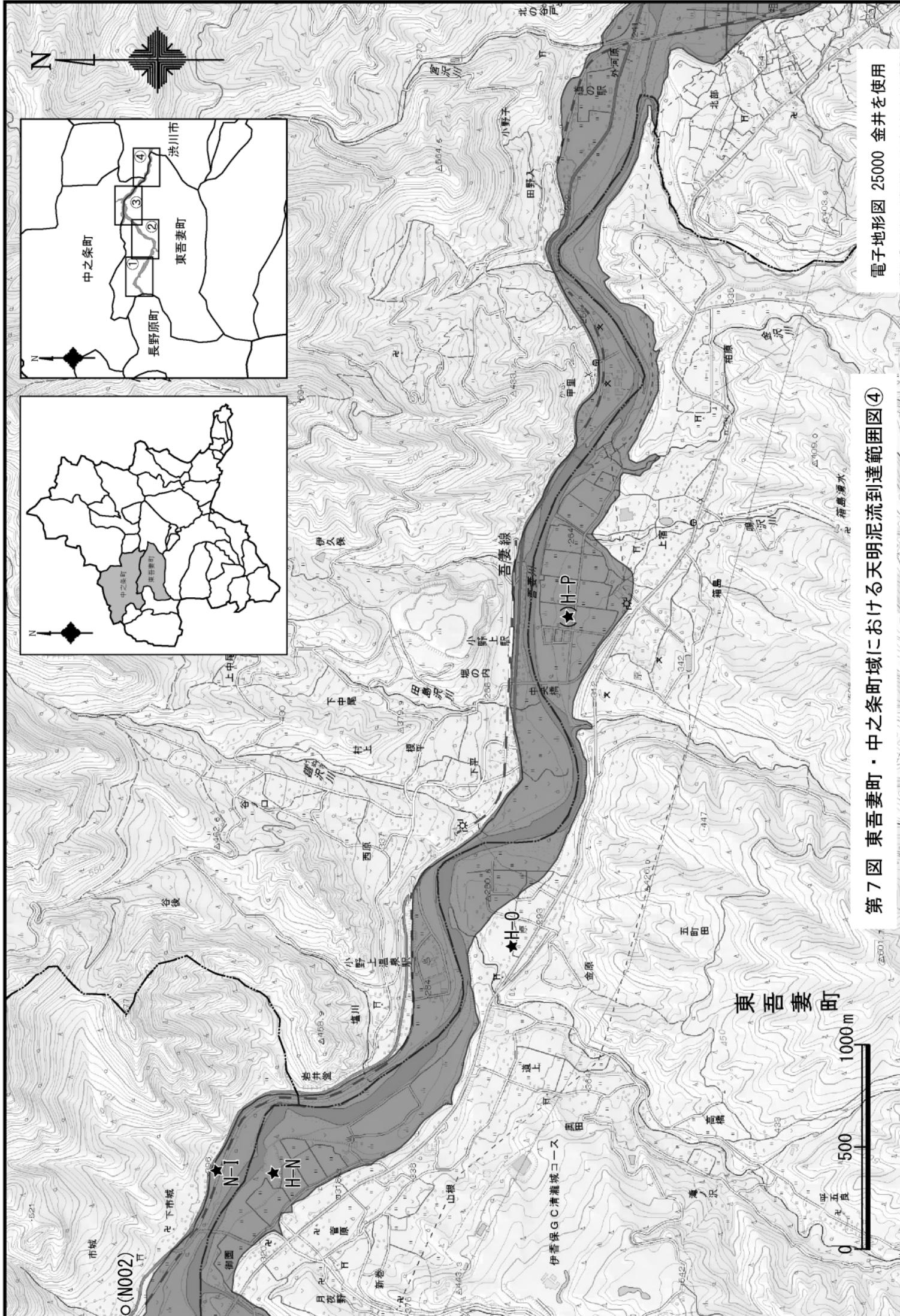




第6図 東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲図③

電子地形図 25000 金井を使用

第7図 東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲図④



参考文献

- 吾妻教育会1936『群馬県吾妻郡誌追録』p.471、477、479-483、485
岩島村誌編集委員会1971『岩島村誌』p.290、352-356、643、645-646、
649、652-653、657、886、991-994、1193、1199、1201、1319
内山信次2001『上州新四国平成遍路記』上毛新聞社p.90、131
大浦瑞代「天明浅間山噴火災害絵図の読解による泥流の流下特性—中之条
盆地における泥流範囲復原から—」2008『歴史地理学』第50巻2号(通巻
238号) pp.1-21
群馬県立文書館寄託伊能家文書 8003-1454-3
群馬県立歴史博物館1995『天明の浅間焼け』p.32
小池利夫1989「竜徳寺の由来」『群馬歴史散歩』93号
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014『年報33』p.33
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『年報34』p.37,38
神社庁吾妻支部1989『吾妻郡神社要項』星文社p.42
関俊明・中島直樹2005『玉村町における天明泥流到達範囲』『研究紀要』23
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団pp.85-98
関俊明・勢藤力・中島直樹2013『伊勢崎市・玉村町域(2)における天明泥
流到達範囲』『研究紀要』31公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
pp.63-80
関俊明・中島直樹・勢藤力2014『前橋市・高崎市・吉岡町域における天明
泥流到達範囲』『研究紀要』32公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業
団pp.88-101
関俊明・小菅尉多・中島直樹・勢藤力2015『渋川市域における天明泥流
到達範囲』『研究紀要』33公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
pp.121.-138
中之条町教育委員会2003『中之条町の文化財』 p.34、40
中之条町歴史民俗資料館2003『中之条町歴史民俗資料館』常設展示解説図録
p.19
中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」2013企画展パンフレット
中庄村八1998『吾妻川から失われつつある浅間石の記載保存』『群馬県立中
之条高等学校紀要』第16号p.18
二宮書店1988『地形学辞典』
萩原進1985『浅間山天明噴火史料集成』I 群馬県文化事業振興会p.358
萩原進1986『浅間山天明噴火史料集成 II』群馬県文化事業振興会p.121-153、
158
萩原進1989『浅間山天明噴火史料集成 III』群馬県文化事業振興会p.25-48
萩原進1995『浅間山天明噴火史料集成 V』群馬県文化事業振興会p.166-167
原町誌編纂委員会1983『原町誌』p.83、86-87、97、139、286、290、298、
427、668、815
古澤勝幸1997『天明三年浅間山噴火による吾妻川・利根川流域の被害状況』
『群馬県立歴史博物館紀要』第18号p.88
脇屋真一1998『吾妻の伝説』あかぎ出版 p.29、56-57